

聖書:ヘブル人への手紙11章8~16節

説教:天の故郷に憧れて

はじめに

本日午後から、皆様から表決書を提出していただくという形で、2021年度の信徒総会を開くことになっております。総会資料の中で触れていることですが、2021年度はヘブル人への手紙11章13節のみことばを掲げながら歩んでいきたいということをご提案させていただきました。昨年の11月に臨時信徒総会を開き、教会墓碑を建てることが決議され、この五月から実際に工事が始まっています。この教会が発足した十八年前はお墓を持つことは夢のような話しでしたから、ここまで来られたのは主の恵みと言うほかはありません。園の会が設置された四年前から、皆さんがお墓の話をされると顔が輝くのです。それを見て逆にこちらが教えられることがたくさんあって、気がついたのは、今日取り上げています11章13節のみことばこそが、皆さんの信仰を表すのにふさわしいのではないかということでした。それで2021年度の道標聖句とさせていただきます。

今朝はこのみことばを取り上げながら、「信仰」について聖書が何を語っているのかを見ていきます。

1 旅人、寄留者

13節を読みます。「これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」

私は小さな時から「この世界に自分の居場所があるのか」、そんな疑問を心に秘めていました。例えば、一着しか持っていない服が自分の体に合わない。でも服が合わないからと言ってこの世界から出て行くわけにはいかないの、無理をして着るしかない。無理をしていますから、どうしても人と同じ道は歩けません。あちこち寄り道をするような生き方になってしまう。それで言われるわけです。「あなたはわがままだ。」そう言われてもどうしようがなくて結構悩みました。それである日、二進も三進も行かなくなるととうとう教会に駆け込み、そこで聖書に出会いました。その聖書にこう書いてあったわけです。「地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」

これを読んで、自分だけが、この世界に居場所がないと感じていたのではない。この世を旅する巡礼者であって、寄留者に過ぎないと告白する人たちがたくさんいたんだと知って、ずいぶんと肩の荷が軽くなる思いがしました。

それはよかったです。新たな疑問がわいてきます。本当の故郷はこの地上にはないというのなら、ではいったいどこにあるのか。言い換えれば、自分にとっての本当の居場所はどこにあるのか、ということになります。

2 アブラハムの場合

1) わたしが示す地へ行きなさい

そこでアブラハムの場合を考えてみる。8節です。「信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。」

このことに関しては、創世記12章1節にあります。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」このようにアブラハムはこの神のみことばに従って自分の故郷を出て行った。じゃ、どこに向かったのか。「わたしが示す地」とありますが、実は神はそのとき教えていないのです。ということは、アブラハムは行き先が分からないまま出発したことになる。JRには、「ミステリー列車」という、乗客に目的地を知らせないで列車を走らせる旅行企画があって、結構人気があるそうです。しかしアブラハムはそんなのんきなことは言っていられない。一族郎党安全に導く責任がある。それでどうしたか。神から召しをいただく前から、アブラハムはカナンへの地に行くことにしていた。それでとりえずカナンに向かった。そうしたら、神は「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える」（創世記12章7節）と言われた。そういう順番です。

2) 約束のものを手に入れることはなかった

とにかくこうしてここが約束の地だとわかった。けれども問題は山積みです。彼はよそ者ですから自分の土地を持っていません。9節にあるように肩身を狭くしながら外国人のように住まなければなりません。結局アブラハムが活着している間に自分の土地として手に入れられたのは、妻のサラを葬る

ために勝ったマクペラの洞穴だけだった。ですから、13節で「約束のものを手に入れることはありませんでした」というのは本当なのです。

これを読んで皆さんはどう思いますか。神ははっきりと「この地を与える」と約束したのに、手に入れられたのはお墓の土地だけだった。「アブラハムは神にだまされたのだ。」世の人たちは当然のように言うはずです。

3) アブラハムの子孫たち

では、アブラハムの息子のイサク、イサクの息子のヤコブたちはどうだったのか。彼らは見ていたはずですが。神は約束のものを親が活着している間には与えなかった。それでどうしたか。イサクもヤコブもアブラハムの信仰を受け継いでいった。普通に考えればおかしいのです。どうして信仰を受け継ぐのか。答えは一つしかない。人は死んだら終わりではなく、神は永遠のいのちを下さるという前提に立っているから。だから、たとえ地上で活着している間に約束が実現しなかったとしても別にがっかりしないし、だまされたと言って神を恨むこともない。神が約束されたものは地上で手に入れることはなかったとしても、天の都をはるか遠くに見て喜び迎えていた。死んだ者を生かしてくださって、必ずそこに入れて下さると信じた。アブラハムに続く子孫たちがこの信仰を受け継ぎ、いま私たちにバトンタッチされたわけです。

3 キリストの十字架の先にある天の故郷

1) 苦しみの意味

それで問題は何かもないのかと言えばそうではない。地上で活着しているかぎり試練が向こうからやって来ます。アブラハムも苦しみを経験した人でした。一族を養わなければならないという責任を負いながら、妻や使用人に関する家庭の中の人間関係で苦しみましたし、世継ぎの子どもが生まれないまま老人になってしまい、当時としては非常に大きな苦しみを通していきます。誰でも苦しみに会うとき、信仰はどこかに吹っ飛びそうになるし、試練などなければ良いのにと思いますが。しかしどうでしょうか。もし私たちに苦しみというものがなかったならどうなると思いますか。想像できます。この世が天国になりますから、天の故郷はいりません。永遠に楽しみが続くのならそれもよい。しかし、いつか終わりがあって手放すときが来る。結局絶望しか残らない。これは大変な苦しみです。

そうしたら試練にも意味があるということになる。苦しみに会うとき私たちは思い起こす事にな

る。やっぱり私たちは地上では旅人に過ぎず、寄留者に過ぎなかった。この地上には自分の故郷はない。苦しみにあえばあうほど、天の御国をはるかに仰ぎ見ることになるわけです。

2) 見えないものを信じる

しかしどうでしょうか。天の故郷を私たちはこの目で見えません。見えないものを信じなさいと言われてもどうしたって疑います。それはごく普通の反応です。それでこういうことを考えてみたらどうでしょうか。世の中には存在ということについて、二つの種類があると考えてみるのです。一つは、目に見えないものは本当はないという考え方。それからもう一つは、目には見えないけれど存在するものがある、そういう考え方です。

まず、見えないものはないという考え方ですが、これはなわかりやすい。財布を開けたらお金が見えない。それは本当はないのです。もし、それでもお金が入っていると張り張るなら、それは病気で「裸の王様」という童話に出てくる王さまと同じ。

二つ目の、見えないけれど存在するもの。まるでなぞなぞですが、そんなものあるのか、と思うでしょう。これも難しいことはない。たとえば「人の心」です。人の心は見えますか。どんな機械を使っても見えません。それでも、見えないから、ないと言う人がいたら、その人は心を持っていないロボットということになる。見えなくても存在するものがあることはこれでもわかります。

このことは11章3節にもある。「信仰によって、私たちは、この世界が神のことで造られたことを悟り、その結果、見えるものが、目に見えるものからできたのではないことを悟ります。」

この世界は神の手によって、目に見えないものからできている。それで、神が造られた天の御国も見えない。そこで、この世界には二つの種類があることを考える。見えないものはない、ということ、見えないけれども存在する。これを考えるのです。天の御国はどちらなのか。人の心ならば自分のこととしてすぐわかります。しかし、天の御国が存在するという証拠はどこにあるのでしょうか。

3) イエスの死とよみがえり

証拠があります。二千年前、中東のイスラエルというところに神の子であるイエス・キリストが来られ、十字架でいのちをお捨てになり、三日目によみがえられました。どうしてそうしたのか。イエスご自身が言われました。「時が満ち、神の国が

近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」（マルコ1章15節）

イエスの十字架は、私たちが罪を悔い改めて神に立ち戻り、天の御国、私たちの本当の故郷である天の御国に迎えてくださるための入り口として備えられていたのです。十字架を見上げるとき、私たちは目には見えなくても、あると信じられる。

私たちがキリストの十字架を見上げるとき、あの先に帰るべき私たちの天の故郷があると信じて憧れるのです。世の人たちの目には、私たちが喜んで教会の墓地を建てようとしていることが、実に不思議に見えるでしょう。そのように励まして下さる主とともに今年度歩んでまいります。